

# 日本記者クラブ会報

第402号  
2003年  
(平成15年)  
8月10日発行

〒100-0001  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎社団法人 日本記者クラブ

## 穏健な知性派アブドラ副首相

### 8月28、29日に記者研修会

ゲストルームで、アブドラ副首相を待っていたのは、中井(読売)、脇(日経)、小倉(朝日)、戸谷(中日)、藤盛(道新)の五記者だった。



昨年十一月クラブのアジア取材団はマレーシアを訪問、副首相とも会見した。五人はその時のメンバー。団長だった中井さんは、企画委員として、この会見(7・11)の司会者だった。

副首相は「やあ、再会できましたね」と顔をほころばせて、各人と握手をかわした。この小部屋がこんなにも明るくリラックスした雰囲気にもたされたことがあっただろうか。会見直前はどんな大物リーダーもしゃれた外交辞令を口にしながらも、内心は身構えているもの。

ところが、この日は全く違った。記念署名の時も、五人の記者たち

と冗談を言い合いながらで、終始、屈託ない笑いがたえなかった。

昨年六月「統一マレー国民組織」の党大会で、マハティール首相が引退を表明し、アブドラ副首相はその後任に推された。直後の同党最高評議会ならびに与党連合の会議でも了承され、ことしの党大会でもこれが再確認されている。

十月のイスラム諸国会議後の首相就任予定を前にしての訪日だった。外相などの閣僚五人のほか副大臣、知事、議員など随員三二人。同行記者も一三人。

政治家としての頂点を目前にした副首相は、前記五人と記念撮影(写真)後会場へ。一時間の英語での会見終了後、玄関まで送りお礼をのべて「次は首相としての会見ですね」と言うと、副首相からは温和不い笑顔が返ってきた。

夏、恒例の記者研修会は八月二八、二九日に行うことになった。

一日目は北川正恭前三重県知事、堂本暁子千葉県知事、増田寛也岩手県知事をパネリストにむかえての研究会「地方から日本を変える―地方分権の進め方」。続いて汐留の共同通信本社の見学会とプレスセンターに戻っての懇談会。二日目は中馬清福・朝日新聞常勤顧問の「四〇年記者の失敗と教訓」、石原慎太郎都知事昼食会、G・ヒールシャー・前南ドイツ新聞特派員の「外国特派員の見た日本のプレス」の順。

中馬さんは政策・政治記者の先駆。編集担当として新聞倫理綱領検討小委員会の委員長も務めた。最近「新聞は生き残れるか」(岩波新書)を刊行。体験的取材論のなかで、危惧すべき「知的情報離れ」への対処についても参加者と一緒に考えてもらう予定。

ヒールシャーさんは滞日三〇年余、党首討論会の質問者としても活躍、外人記者クラブの会長経験者でもある。地方会員社の要望で始まった記者研修会として六回目。各社からの多数の参加を。

(専務理事 岩崎玄道)

## ク ラ ブ ゲ ス ト

## 富山 和彦 産業再生機構COO

## ▼骨太の新人類

四十三歳の企業人にしては珍しく「骨太」の人である。「次世代のために我が身を捨てる覚悟で」「事業再生を国民運動にできれば……」。聞きようによっては「グサイこんな言葉が不思議に説得力を持つ。

スタンフォード大留学時代は企業派遣で卒業後の就職の心配もないのに、米国人女子学生に誘われ学生の就職活動の手伝いをしたりと、世話好きと行動力は根っからの資質のようだ。

一億円近い年収をふって、官製の企業再生ビジネスである産業再生機構のトップの一角に就いた。銀行の不良債権問題と表裏の関係にある過剰債務企業問題を解決しなければ、日本経済の長いトンネルの出口は見えない。

「市場原理にまかせておけば済むものではないし、とうにその時期は過ぎていく」「新しい戦略、人材、金が必要になる」。多くの日本人もそう思い始めている。

だが、現実には生臭い。銀行は火の粉が降りかかるのを恐れ、なかなか大型案件を持ち込もうとしない。経済産業省や金融庁など、役所の縄張り争いも垣間見える。一号案件をまとめる作業は遅れていると聞く。

「二十年近い自分のキャリアのうち十六、七年がリセッションだった。(いつか良くなるという)春待ち症候群でなく、問題に正面から向き合う動きが(日本でも)出てきた」

MBA取得と民間企業の経験で得た合理的思考と浪花節がハーモニイを奏でられるか。日本経済再生の第一線に立つ新世代の活躍を応援したい。

共同通信経済部長

伊藤 修一

## アブドラ・バダウイ マレーシア副首相



## ▼次期首相としてのかじ取りは?

「マレーシアの成功は国の団結を大事にし、一貫した政策を長期にわたって実施してきたことだ」

十月からマレーシアの首相になる。お披露目を兼ね主要閣僚を連れて日本を訪れた。「マハティール路線の継承」と「国の団結」を強調した。二十一年間統治した現首相の存在はあまりにも大きい。相手が米国だろうと、言うべきことは遠慮なくビシビシ発言する姿は小気味よかったが、その脇で内政に目配りしたのが「誠実で地味」なアブドラ氏だった。

人口二千万人、マレー人が主体だが、中国人、インド人などが入り交じる人種複合国家。イスラム原理主義者も少なくない回教国

で、国民をまとめて進むことは容易ではない。

マハティールと反りが合わず、失脚させられたアンワル元副首相を支持する勢力はいまなお根強い。雇用や進学でマレー人を優遇する政策への反発も広がっている。

「ルック・イースト」を合言葉に工業化を成功させたマレーシアは、次の目標をどこに置くのか。

「国益や政策はそれぞれの国によって違う。独立国なのだから、意見を言う権利を持っている」

米国のイラク侵攻に反対した理由を問われ、きっぱり答えた。

国は小さくても、誇りと独立心は旺盛だ。だが民族意識を鼓舞すれば原理主義に火がつき、妥協に回れば求心力は弱まる。路線継承を掲げながらマハティール後をどう描くか。かじ取りは容易でない。

朝日新聞経済部兼アエラ編集部

山田 厚史

7・11(金)記者会見 司会 中井康朗委員 通訳 長井鞠子 出席 76人



7.11(火)昼食会  
司会 矢島誠司委員  
羽生健二委員  
出席 81人

志位 和夫 共産党委員長

▼理想主義と秘密主義

テーマは絞られていた。「綱領改定案」と「セクハラ」と「禁酒令」である。代表質問を仰せつかった筆者としてはそれなりに攻め方を考えて臨んだつもりだが、当然のことながら、ゲストもそのぎ方を考え抜いていた。

第一問は「セクハラで参院議員を辞めた」筆坂秀世氏は何をしたのか。ストリートで攻めたが、志位氏は笑顔と冗舌でかわし、実質無回答で押し切られた。第二問で「党内禁酒令」の存否に関する志位発言の矛盾を突いたが、「セクハラと飲酒を短絡させたのは筋違いだった」という既報の釈明を引き出しただけで終わった。

国会質問の前日、志位氏は自宅



7.14 (月) 昼食会  
司会 村田正敏 理事  
山田孝男 委員  
出席 113人

のフロにつかりながら想を練るといふ。記者会見対策も同じとみえ、スピーチ草稿の欄外は、覚え書きらしき書き込みで埋め尽くされていた。結果として「セクハラ幕引き会見」に手を貸した寝覚めの悪さが残るが、共産党がダメージをぬぐい去ったわけでもない。

綱領改定案をめぐる質疑は、活発とは言い難かった。志位氏は冒頭発言で国連統計を引き、国際間の貧富の格差が広がっていることと指摘したうえで、「この世界のどこかで次のマルクスが歩いている」という警句(D・ロストフ氏、昨年一月二十日付米ワシントンポスト紙)を紹介した。傾聴に値する。共産主義思想を守り抜いて人類の平等を追求するといふ理屈はわかる。綱領改定案の理想とともに、醜聞を完璧に封印する共産党の宿命的な秘密主義を、こもこも引き出した記者会見だったとも言えようか。

毎日新聞政治部長

山田 孝男

柳井 俊二 中央大学法学部教授



7.15 (火) 研究会  
「米外交の行方」②  
司会 春名幹男 委員  
出席 100人

▼前駐米大使の「日米同盟」論

クリントンとブッシュ。対照的な二つの米政権の変化を、駐米大使として体感しつつ、日米関係の本質をじっくりと見つめてきた。それだけに、柳井教授の「日米同盟」論は、豊かな経験に裏打ちされた、説得力あふれるものとなった。

二〇〇一年九月八日、日米の有識者が、対日講和条約と日米安保条約の調印五十周年を記念して、サンフランシスコでの式典に集った。「いろいろな脅威にさらされている現実に対応するため、日米同盟を強化していくべし」との結論で一致して、その三日後に、あの同時テロが発生した。

危機管理にあたって同盟が実際に機能するのか、が問われた。「湾岸戦争の時とは違って、日本の対

応はよかった」というのが、振り返ってみての自身の採点である。「テロとの戦い」への支持表明、在日米軍基地の警備実施、自衛隊の後方支援派遣など、日本の機敏な行動があったからこそである。憲法九条のもとで「侵略を繰り返さない」「軍事大国にならない」という「消極的平和主義」だけでは世界の平和は保てない、「もっと顔の見える『積極的平和主義』を進める」方向で論議を深めるべきだ、という信念が、大使としての奔走を支えていたに違いない。

北朝鮮への対応など、同盟の真価が問われる局面がなお続いている。米国世論の力の大きさを指摘し、平素から日米関係を強固にしておく必要性がある、と展望した。日米首脳会談での「真昼の決闘」談議の内幕や「ハタ迷惑な話」の『真相』など、「現場ならでは」のエピソードも満載で、密度の濃い研究会だった。

読売新聞論説委員

山岡 邦彦

## ク ラ ブ ゲ ス ト

## チャールズ・カプチャン 米外交評議会上級研究員

## ▼米欧の分離・分断

唯一の超大国となった米国が、国際世論の反対を押し切ってイラク戦争にまい進するのを目の当たりにして、内外で「アメリカ帝国論」が一種のブームになっている。そうした中で、いずれ米国が衰退して欧州が米国に並ぶ存在として台頭するとカプチャン上級研究員の主張は挑戦的であり、我々の認識に修正を迫るものであった。

カプチャン氏はブッシュ政権について、建国から第二次大戦まで続いた米国の伝統的な単独行動主義・孤立主義に回帰していると分析した。その一方、最近の力の行使の仕方は米国の財産である国際的な正当性を傷つけていると警告し、リベラル派らしく米国の慢心を戒めた。



7.16 (水) 研究会  
「米外交の行方」③  
司会 春名幹男 委員  
通訳 池田薫  
出席 105人

イラク戦争をめぐる「古い欧州」の独仏と、米国を支持する英・中東欧諸国が対立し、欧州は内部分裂をさらけ出したように見える。しかしカプチャン氏は、欧州が統合に向けて着実に実績を積みできたことを強調。在欧米軍削減による北大西洋条約機構(NATO)の機能不全が「強いEU」への指向を強め、現在の亀裂は逆に統合に拍車をかけるとの見方を提示した。

最近のユーロ高も、カプチャン氏は欧州台頭の兆しとみる。

ただ一つ惜しいのは、米国がハイテク技術を駆使した軍事革命(RMA)で先行し、軍事力で他国を一層引き離しつつある中で、将来なぜ影響力を弱めるのか、そのプロセスが必ずしも明確にされなかった点だ。もっとも、近著「アメリカ時代の終焉」が今秋に日本でも出版されるとのこと、そうした点を含めた同氏のユニークな視座が示されるのを期待したい。

日本経済新聞国際部

横田 勇人

## 勝俣 恒久 東京電力社長



7.23 (水) 記者会見  
司会 長沢光男 委員  
出席 119人

## ▼ノーネクタイで決意表明

節電をアピールして上着もネクタイもないでたちで現れた勝俣社長は、一連の不祥事と首都圏を停電の不安に陥れた自社の罪を陳謝し、節電協力に感謝した。

ここまでは福島や新潟の立地地域をおわび行脚した展開と同じだが、この後の説明はトップ企業の経営責任者らしく、自信に満ち、根拠の薄い批判は毅然として退ける気概を感じさせた。

英国一国を上回る首都圏の電力需要。それが昼下がりに集中する特異さ。「原発一基百三十五万キロワットを一度の気温上昇が飲み込む」。「六千万キロワットを超える需要が発生するのは年間八日程度だが、どこで起きるか分からない」。原発四

基が運転を再開して電力危機は去ったとする論調を「せつな」と一蹴し、残る停止原発の早期運転再開に強い意欲を示した。

今回の問題では、運転再開に慎重な佐藤栄久福島県知事と東電との関係に注目が集まりがちで、この点の質問もだが、勝俣社長は当然のように否定した。

地元は、ステージの違う原発の安全・安心問題と首都圏電力需給問題とを、同一に論じてわい小化されたくない思いがある。この点で、勝俣社長は今回浮き彫りになった課題を列挙し、国、電気事業者、地元の間根深く広がる問題に、新たに消費者の視点を加えて再検討していく方針を示唆した。

「若干ふんり返っていかもれない。発電所の一人ひとりが自分の発電所と思えるよう条件整備する。時間はかかるが進めなければならぬ」。地元は、勝俣社長の決意を信じるしかない立場にある。

福島民友新聞東京支社

小野 広司

■ 会議報告 ■  
第244回会報委員会

(7・10 ゴールドルーム)  
七月号について意見交換した後、八、九月号の編集方針を協議した。  
出席 住田委員長、仙石、中園、橋場、福沢、元田の各委員。

△ 法人会員代表変更 ▽

- ( ) 内旧代表・敬称略
- ▼ 報知新聞社 安原道夫代表取締役社長 (伏見勝)
- ▼ 日刊工業新聞社 千野俊猛代表取締役社長 (菅野泰平)
- ▼ 日本農業新聞 菅原哲朗代表取締役社長 (島田圭一郎)
- ▼ 福島民友新聞社 伊佐早幸代表取締役社長 (黒崎精三)
- ▼ 山梨日日新聞社 野口英一取締役会長兼社長 (小林茂)
- ▼ 名古屋タイムズ社 斉藤光雄理事社長 (加藤延之)
- ▼ 熊本日日新聞社 伊豆英一代表取締役社長 (永野光哉)
- ▼ テレビ東京 上田克己常務取締役経営戦略局・メディア開発局・関係会社担当 (田村哲夫)

第150回施設運営委員会

(7・17 シルバールーム)  
ラウンジの分煙について意見交換し、簡易吸煙装置の設置を決めた。  
四月、五月、六月の貸室利用状況とアラスカ売り上げを事務局が報告した。

- ▼ 毎日放送 角田友明東京支社長 (門前満孝)
- ▼ 朝日放送 渡辺克信代表取締役専務取締役 (植田譲二)
- ▼ テレビ大阪 富澤秀機代表取締役社長 (鞍田暹)
- ▼ テレビ新潟放送網 前川磐代表取締役社長 (北川信)
- ▼ 東海ラジオ放送 志村富士夫代表取締役社長 (藤井道雄)
- ▼ テレビ愛知 佐藤富男代表取締役社長 (梶田進)
- ▼ 山陽放送 文屋好司東京支社長 (菅田一郎)
- ▼ 広島テレビ放送 後藤文生代表取締役社長 (藤川魏也)
- ▼ 九州朝日放送 権藤満代表取締役社長 (細川健彦)
- ▼ NHKエンタープライズ21 板谷駿一代表取締役社長 (酒井治盛)

出席 岡元委員長、冷水、阿部、古野の各委員。  
第323回企画委員会 (7・22 宴会場)

新委員の谷口育生時事通信解説委員長 (旧・金重紘氏) が紹介された後、「第六回記者研修会」(八月二十八・二十九日)と、自民党総裁候補の討論会について担当委員から実施要領などの提案があった。

出席 宇治委員長、山田、中井、永野、小池、矢島、春名、谷口、菅沼、影山、羽生、川戸、和田、中村、長沢の各委員。  
第311回会員資格委員会 (7・23 シルバールーム)

八月一日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。  
出席 滝鼻委員長、瀬戸、佐藤、岡崎、塚越、船田、工藤の各委員。

第383回理事会 (書面)  
左記の理事交代を了承した。  
全国朝日放送  
(新) 中井 靖治 常務取締役報道情報局長  
(旧) 宮地 正美

情報発信

○ 西部開発の拠点 就任間もない地元出身の王鴻拳重慶市長は、霧(煙害)の町に青空がもどりました、と日本のODAと技術支援に感謝。西部開発の中心としてインフラ整備を進めている状況を説明、日本からの投資に期待を示した。坂と山が多いので交通手段としてモノレールに注目していると、具体的な計画を(7・23)。

○ ペルー独立記念行事 カルデナス副領事が東京の新木場で行う祝祭行事の内容を発表。会場ではペルーの民族楽器と鼓の共演も披露された(7・23)。



クラブでは基本会員の推薦と専務理事の許可で、会員以外の団体、組織にも記者発表の場として施設を提供している。

## 書いた話 書かなかった話

『日本列島改造』のころ

## 二階堂長官のポツリ



清水 幹夫

した後では、この2DKほどのマンションが二階堂長官の住まいとはどうしても結び着かない。

だが、「せっかく来てくれてもなア、上がってもらう所もないんじゃない」といいながらも、

新参の「一番」記者を玄関先に招き入れて話に応じてくれたものだ。

朝駆けを重ねるうちに、米国に渡った青年時代の壮絶な体験などを聞き出したりしたが、このころ政局の課題は、なんといっても田中政権が日本列島改造論を掲げて登場して以来、全国各地で拍車がかかった地価高騰問題だった。

NHKと聞いてピンとくるものがあつた。当時、千代田区内幸町にあつたNHKの本館跡地を、三・三平方メートル当たり千百万円、総額三百五十四億六千余万円という超高額で三菱地所が落札、さらなる地価ハネ上がりを感じさせるものとして、庶民の話題をさらって

いたからだ。

建設省（当時）の地価鑑定委員会による公示価格によれば、このころのビジネス一等地とされたNHK本館の敷地は、三・三平方メートル当たり約四百五十万円。実にその三倍に近く、しかも、売り手がNHKという公共機関、落札したのが業界をリードする三菱グループの有力企業。異常な反響を呼んだのも無理はない。

列島改造論でブームをつくった田中内閣の土地政策を、正面から打ち砕くような超高額契約に、二階堂長官が不快感を持たぬはずがなかつた。これは何か手を打とうとしているな、というにおいが、ポツリともらしたひとことに感じられたのである。

ただ、すぐには書けなかつた。第一、何か手を打とうにも、いくら常識を超えた売買とて現行法規では政府が介入する手段は見当たらない。何をどうするのか。その後、朝駆けのたびに、ひとことだけ聞いた。「NHKはどうなんで

「NHKがなア」。愛用の葉巻をくわえながら、ふと、口からもれたこんな言葉が妙に気になったのは、激動の一九七二年も間もなく暮れようとしている十二月のことだった。

佐藤内閣での「番記者」を卒業し、二カ所ほど官庁の取材に当たった後、田中内閣発足とともに官邸クラブに戻り、命じられたのが二階堂進・官房長官「番」。長官の私邸に通い詰めていた、ある朝、世間話から始まっているいろいろな話題に及んだ後、帰り際の玄関で二階堂長官がタメ息をつくようにつぶやいたのが、冒頭のひとことである。

当時、二階堂氏は東京・飯田橋にほど近い新宿区揚場町の小ぶりのマンションを東京での住まいにしていた。二階堂氏の生家がある大隅半島のほぼ中央、鹿児島県高山町の自宅にも、この年十二月初めに行われたばかりの衆院総選挙での現地取材などで何回か出向いたのだが、先祖が鎌倉から薩摩に入った地頭というこの生家、眼下に川が開け、裏山を背にする自然の要塞ながらの重要文化財。当主が帰郷すると裏山に張りめぐらされたぼんぼりに灯がともされる、という。「ウン、鹿児島この家に帰ると一番安心するね」と常々語っていた生家の壮大さに接

すかね」と。そして、二階堂長官はどうか、地価高騰に反発する世論を背景に、NHKと三菱地所の双方に働きかけて、この超高額売買を「白紙還元」させたいと考えていることが分かってきた。

それでも、まだ記事にするのに躊躇した。いくら政府首脳が「圧力」をかけたとしても、白紙還元など出来るものだろうか。世論向けのポーズが狙いで、出来ない知りつつ、書かせるために漏らしたのではないか、などと勘繰った。結局、この「ひとこと」を懐

七三年が明けると、これは、という動きが相次いだ。NHKの小野副会長（当時）が田中首相を東京・平河町の砂防会館に訪ねたのが一月六日。二階堂長官から金丸建設相、久野郵政相に打つべき手を検討するよう指示が出され、八日にも久野郵政相がNHK幹部から実情を聴取する、との情報……。これは本物だ。ちょうど関係の閣僚ポストを占めていた田中派の役

者もそろった。それまでため込んでいたメモを一気にきだしたのが七三年一月七日付、日曜日の朝刊一面トップ記事である。

「NHK跡地の超高額契約 政府「白紙還元」めざす」「官房長官らが説得」「土地政策の試金石に」……見出しだけでも十分に官房長官の狙いが分かる記事になったように思った。「世間は高い高いというが、土地だけでなく、建物の評価も入っている。建物はこのまま五年間はつぶさず、丸ビルの建て替え用を使う」「売却した金は別の形で視聴者に還元する」と両当事者のトップの言い分も書いた。

反応は大きかった。財界首脳といわれた人たちにも白紙化への支援論や政府の介入容認論が出た。三菱グループ内でもさまざまな対応が語られた。

ところが、この記事は統報が書けなかった。政府の要請にもかかわらず、売買の当事者が応じない以上、やはり、最初から白紙還元

は無理だったのである。「政府に介入の権限はない」と二階堂長官が公式の記者会見で繰り返すようになったことが、それを物語っていた。話はいつのまにか、うやむやになった。

二年目に近づいた田中内閣は地価、物価抑制が最大の課題になり、結局、列島改造は条件整備が整う前に土地高騰が全国に波及する惨状に至るのだが、「NHKが……」とうめいた二階堂氏のハラの中は、あらゆる方向に急カーブしていく列島改造論の現実を前に、なんとかして地価抑制へブレーキをかけなければ、という執念であったように思えてならない。単に、ポーズをとっただけの「ひとこと」ではなかったと信じている。

「趣味は田中角栄」という俗説をもつ二階堂氏だが、「忠臣・二階堂」としては、列島改造論が、バラ色の未来ならぬ土地高騰列島へ、みるみる変身していく姿に、我慢がならなかったのにちがいない。

同時に、意外に？庶民的な二階堂氏の知られざる一面が、白紙還元できないかとの発想の底にあったのではないか、との思いもある。郷里に帰れば広大な屋敷と自然に囲まれる当主も日常的には庶民そのものの、狭いながらも利便な都心の住まいを、どこか楽しんでる雰囲気も感じられたからだ。そして、「我が誠の至らざるを常に尋ねべし」という西郷隆盛の遺訓をモットーとした愚直さが原点にあった、とも、いま考える。

ともあれ、列島改造は、現今の地価下落など想像も及ばない土地狂想曲の悲喜劇まん延に終わるのだが、その渦中であって、思わぬ乱流をふさぎ止めようと側近が舞台裏で苦闘した一つの断面として、その取材メモが残っている。

しみず・みきお会員 一九三九年生まれ  
六三年毎日新聞入社 東京本社社会部を経て政治部 政治部副部長 論説委員  
政治部長 論説副委員長 論説委員長などを歴任 論説室顧問を経て(社)アジア調査会常務理事 ○一年から同専務理事・事務局長

書いた話

書かなかった話

ワーキング  
プレス

## ゼイタクな悩みいつまで

▼岡本 浩孝

(デイリースポーツ社)

優勝に向けたカウントダウンが始まった。星野阪神が思い描いてきた夢に、間もなく「日付け」が入る。

虎の快進撃は今や関西に止まらず、全国的な関心事となっている。

星野監督からは「みんな、あたり過ぎだよ」とクギを刺されたりもするが、他球団に付け入るすきを与えない勝ちっぷり、年間100勝さえ見込めるハイペースを目の当たりにすれば、こちらもVを確定事項として日々の原稿を書いていかざるを得ない。今後、大きく落ち込んでゆく要素が、どう客観的にみても存在しないのだから、致し方ないだろう。

だがこれはあくまで取材する側の言い分。実際に日々を追いかけていく中では、選手たちとの間に、かなりの温度差も感じている。

一つの例を出してみる。点灯したマジックを順調に減らしているにもかかわらず、ナインの口から「優勝」の二文字が全く聞かれないのだ。

どうしても、その言葉を発してほしい訳じゃない。だがこれだけの独走状態ならば、自然と口を突いてもおかしくないはず。だが、選手たちはファンの大喝采を浴びる甲子園球場のお立ち台でも、異口同音に「一戦、一戦、大事に戦っていくだけです」と繰り返す。どこまでも慎重。景気のいいコメントはなかなか出てこないのが現状である。

確かに一戦必勝が、星野阪神の

スタンスだ。目の前の1球にただ集中することを首脳陣は説き、それを選手が実践してきたからこそ、数多くの逆転勝ち、打線が見事につながったビッグイニングの形成が可能になった。

ましてチームを率いる星野監督が戒めている部分がある。「俺がしつこく言つとるからな」——これは束ねる者として当然のスタンス。指揮官が決して手綱を緩めずから、選手たちが軽々に優勝を口にしないのも、ある意味、うなずける。

とはいえこちらも仕事。やはりたまにはインパクトのある言葉がほしい時もある。だからいろいろと考えを巡らせる。

個人成績に目を向けるのは、一つの常とう手段だ。最多勝の最有力候補である井川、最優秀防御率をうかがう伊良部、そして、ここまで首位打者をキープしている岡本……

それもただ単にタイトルに関する質問をするのではなく、そこにもう一つ、「パース以来の……」村

山以来の……といった味付けをして、選手にぶつける。

それでも岡本などには「よく調べてきますね。でもそういうのはいいですよ」と、あしらわれてしまいう始末である。

こちらも一つひとつのゲームに集中している選手たちの邪魔にはなりたくない。だが、抑えようがないほど盛り上がるファンと、一歩、一歩を大事にする現場とはさまに在る我々としては、どこかでバランスを取りたくなる。景気のいいコメントがなくても連日、華やかな紙面を作っているのだが、ゴールがいよいよ見えてきたここに至っては、そろそろ本音が聞きたい。

こちらが振らずとも、自然と派手な言葉が選手の口を突くのは、いつの日か——沸き上がる周囲とプレーヤーたちの「熱度」が初めて、ぴったりと一致する瞬間が待ち遠しい。

おかもと・ひろたか 一九九六年入社 遊軍 近鉄 阪神 オリックスを担当し 昨年 年から阪神担当に復帰



ワーキング  
プレス

## 大補強をしてほしい

▼矢部 裕己

(報知新聞社)

正直、参っている。7月13日の阪神戦（甲子園）が雨天中止となり、巨人は40勝41敗1分けの借金1で前半戦を終えた。首位を走る阪神に18ゲーム差をつけられ、4位で折り返し地点をターンした。これほどの苦戦を、いつたいただれが予想しただろう。

広島で食事に誘ってもらい、アルコールで頬を赤らめた原監督が「見ているよ。阪神に5ゲーム差以内で8月に入ったら、絶対に逆転してやるから」と何度もうなずいていたのは、6月初旬だったと記憶している。

このときは、まだ10ゲーム以内で2位につけていた。「絶対」を3度も繰り返す

その迫力に、「ひよっとしたら」と淡い期待を抱いたのを覚えている。

その時から、わずか1か月余り。ずいぶん状況は変わった。逆転優勝の青写真を描いていた原監督も勝率が7割を超える阪神の快進撃に目を見張り、「このまま走ったら、ここまで高い勝率を誇るチームは最近、ちよつと見たことがないね」と事実上、力の違いを認めるほど。阪神の優勝は担当記者の、そして世間の「常識」となり、各紙の巨人報道は縮小の一途をたどっている。

今さら言うまでもないが、報知新聞は巨人報道が大きな看板になっている。チームが弱いからといって、その質と量を落とすわけにはいかない。しかし、ひと昔前は「巨人が負けたら、怒って窓からテレビを投げてしまう」と言われ

るほど熱狂的なのが巨人ファン。勝てば、その裏にあるインサイドストーリーを読みたくもなるだろうが、敗戦の翌朝に報知新聞を買って、再びストレスをためようというG党は少ないだろう。ならばスクープで振り向かせるかーといきたいところだが、そう簡単に特ダネが転がっているはずもなく、チーム同様、我が巨人担当も苦戦を強いられている。

しかし、今こそテンションを高めて報道していかねければならない。原監督にとって本当の勝負は後半戦だと思ふからだ。前半戦はけが人がほとんど出なかった阪神が頭一つ以上、抜け出した。一方的な見方をすれば、それだけのこと。ところが、後半戦は巨人以外のチームも戦力が整う。優勝へのモチベーションこそ薄れてはいるものの、地力の違いが勝敗に表れる。加えて、新戦力も台頭してくる。原監督は前半戦以上に過酷な戦いを強いられるだろう。大相撲の名横綱だった北の湖のような、憎らしいほど強い（と、子供心ながら思った）巨人が見たい。取材

したい。書きたい。そして、束になって巨人に襲いかかる、1対5の戦国ペナントレースに一喜一憂したい。

そのために今オフは積極的な、いや、あきれるほど欲張りな大補強を、原監督にはしてほしい。巨人は報道される機会が多いせい、か、良くも悪くもイメージを重視する。しかし、他球団から獲得した選手を集めたっていいじゃないか。勝てば官軍。大量の解雇者を出し、他球団から戦力を補強して成功した星野監督と今年の阪神を否定する阪神ファンは少ないだろう。古くは金田、張本。最近では落合、清原。巨人だって補強を繰り返して強くなつていった。

新米キャップの私は、原監督の一言が忘れられない。「矢部君、人は分不相応な舞台に立ったとき、成長するんだよ」。つらいことがあると、いつもこの言葉を思い出す。読者のために強い新聞を作りたい。原監督にはファンのため強い巨人を作してほしい。

やべ・ひろき 一九九三年入社 三年半の文化部芸能担当をはさみ 横浜担当を経て 三度目の巨人担当 今年からキャップ

## ●ブレア政権 vs B B C

ワーキング  
プレス

## 世論の支持は18対54

▼長谷川健司

(共同通信社)

イラク戦争を正当化するため英政府がイラクの脅威を誇張した疑惑をめぐり、ブレア政権とB B C放送の

対決が激化している。政府の情報操作を報じたB B Cの取材源だった大量破壊兵器の専門家の国防省職員が自殺した後も、両者は一歩も引かず、主張は平行線。自殺原因を調べる独立調査委員会の結果次第では、閣僚やB B C首脳部の責任問題に発展しそうだ。

問題となったB B C報道は、英政府が昨年九月に公表したイラクの大量破壊兵器に関する報告書で、英情報機関が疑問視していた「イラク軍は生物・化学兵器を四十五分以内に配備できる」との情報、首相府

の圧力により主要な脅威として報告書前文などに盛り込まれたというものだ。

これを五月末に報じたB B Cのギリガン記者は数日後、英紙への寄稿で「圧力をかけたのはキャンベル首相報道局長だ」と名指し。ブレア首相側近としてメディア戦略を担当するキャンベル氏は「誤報だ」と全面否定し、B B Cとの対立が決定的となった。

キャンベル氏はジャーナリスト出身。長期低迷していた労働党のイメージを一新し、中道左派の「新しい労働党」として一九九七年の政権奪取に導いたブレア氏の「懐刀」だ。しかし、政権の功績をメディア工作で水増し宣伝する手法がたたって記者からの信頼は大きく低下しており、ギリガン記者の「キャンベル犯人説」に他の英メディアも一斉に飛び付いた。

これに対しキャンベル氏は、疑惑を調べる下院外交委員会がB B Cを激しく批判。国防省は、同省の大量破壊兵器専門家ケリー博士がギリガン記者の情報源だったことを明らかにし、博士は外交委で質問攻めに遭った数日後に自殺した。

B B Cはイラク戦争で米英に批判的な視点を交えた冷静な報道をしており、ブレア政権が疎ましく感じていたことも対立激化の背景にあるとみられている。B B Cは一貫してギリガン記者の報道を全面的に支持。ケリー博士が別のB B C記者に首相府の情報操作を示唆した会話テープを持っているとされ、調査委員会に証拠で提出される見通しだ。

B B Cは日本のNHKと同様に視聴者の負担が主要財源だ。政府内からは、今回の対応が二〇〇六年のB B Cの資格更新に影響するとのけん制発言も出ている。

こうした動きに対し、B B Cのデビビス会長は英紙への寄稿で「われわれは政府と異なる視点を持つがゆえに懲罰されようとしている。視聴者から長年の信頼を得ているのは、国家の意見を流して

いるからでは断じてない」と批判した。

政府と対決するB B Cの姿勢は一般に歓迎されているが、「一つの情報源に基づく一人の記者の一つの報道に、ここまで固執する価値があるのか」（英紙）と、仮に報道に落ち度が判明した場合の反動を懸念する声もある。

英国メディアは、政権に対する容赦ない批判で知られる。日本の政権批判報道は、野党や党内非主流派の政治家の言葉現象として伝えることが多いが、英国ではメディア自身が座標軸を持ち、記事に明記する筆者の責任で政府内の声や傍証を集める手法が普通だ。政府とB B Cの対決報道でもこの原則は変わらず、読者は政界に政界中心でない多様な視点を享受しているようにみえる。

七月下旬に英紙が発表した世論調査では、情報操作疑惑で政府とB B Cのどちらを信頼するかとの質問に、政府がわずか18%だったのに対し、B B Cは54%と大きく上回っている。

はせがわ・けんじ 一九八五年入社 テヘラン支局長 經濟部などを経て二〇〇〇年十二月からロンドン支局長

# 福島発

双葉郡

## 原発十基

### 国への根強い不信感

▼五十嵐 稔

(福島民報社報道部)

一連のトラブル隠しによって全基停止に追い込まれた東京電力の原子力発電所の運転再開問題で、福島県の佐藤栄佐久知事は七月十日に県内最初となる福島第一6号機の再稼働受け入れを表明したが、この間、関係者は知事の腹を読みきれない状況が続いた。

知事がようやく運転再開を「了」とする答えを出してから八日後、経済産業省原子力安全・保安院はさらに福島第一3、5号機、福島第二1号機についても「安全宣言」をした。これを受け、立地地域は

県に早期の運転再開受け入れを要請。県は知事を中心に、続く三基のプラントについて、再稼働の是非をめぐる論議を始めたが、これまで同様、運転再開の見通しは測りにくい状況にある。

本県では太平洋岸の双葉郡に東電の原発十基が立地し、関連、下請けを含めると九千人余りが働いている。原発停止による地元経済への影響は小さくなく、福島第一6号機に対する国の安全確認を受け、立地地域は県、県議会に早期の運転再開受け入れを要請した。

県議会はこれにこたえて運転再開を受け入れる意見集約をしたが、知事はその後、一カ月間も結論を出さなかった。この間、県議会としての方針を伝えてもなお判断を示さない知事に対し、議会内から「議会軽視」の批判も出た。

「原発停止に伴う首都圏の電力危機は地方経済にも影響する」として、地元経済界からも早期再稼働を求める声が上がったが、それでもかたくなに「運転再開」に言及しなかった知事の胸のうちには国への根強い不信感がある。その思いは今も変わっていない。

一連のトラブル隠しを教訓に、県をはじめ原発が立地する全国の自治体からは原子力政策を推進する立場の経済産業省と規制機関である原子力安全・保安院を分離すべき、との意見が出ている。にもかかわらず、同省は「原子力政策を推進するには安全面の掌握も必要」「保安院の独立性を高める法改正で理解が得られる」などとして、一向に動くことはしていない。

七月に同省が打ち出した国のエネルギー基本計画案にも分離問題は触れられていない。

さらに、本県は原子力発電と核燃料サイクルを切り離して検討するよう求めてきたが、基本計画案は「共に推進する」との方針で、県は「地元自治体の声に耳を傾けない姿勢は何一つ変わっていない」との思いを強くしている。

「今度の再開論議は長くなる。県幹部の一人はそんな見方を示す。新たな三つのプラントはひび割れなどのトラブルを抱えていたため、福島第一6号機以上に安全性に対する精査が必要になるからだ。」

再稼働の是非を判断する材料はそれだけにとどまらない。福島第一6号機の場合、県議会などからの要請もあって「時間切れ」での決着、という感もあったが、今回は保安院分離問題やエネルギー基本計画案などをめぐる「国の体質、体制」（県原子力安全グループ）がより重要なポイントになり、相応、時間をかけた議論が積み重ねられる見通しだ。

(いがらし・みのる)

#### 双葉郡(ふたばぐん)メモ

双葉郡は8町村。沿岸部に北から大野、富岡、楡葉、浪江、双葉、大熊、富岡、楡葉、2村が、内陸部に葛尾、川内、双葉、広野、熊鷹、東京電力福島第一原発が立地している。郡内には、サッカーのナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」がある。温暖な気候で、海水浴の海、山、川の幸をたのむ魅力。

故国の伝統、言語などをかたくなに維持しようという一世と、主流派に溶け込んでゆこうとする二世以降の世代との葛藤は、移民社会の米国ではおなじみのテーマ。この映画では全米に約三百万いるギリシャ系が主役だ。「ギリシャ人と結婚してその子孫を残し、死ぬまで家族の食事を作り続ける」のがギリシャ系女性の変わらぬ責任だと固く信じる父親は、婚期遅れの娘トゥーラが恋人に、菜食主義の英国系新教徒を選んだことから不幸のどん底に。何しろ「英国人など、ギリシャ人が哲学を語っていた頃、まだ猿だった」と豪語する父親にとつて、人間は「高貴なギリシャ人か、それ以外の野蛮な外国人(クセノ)」の二種類しかない。だから、世界の言語もすべてギリシャ語に語源があると公言する。

恋人のイアンは、ギリシャ正教に改宗し、トゥーラの母親の協力も取り付けて、やっと父親

## 試写会

の同意を得、ギリシャ式のピッグ・ファット(大仰な)ウエディングにこぎつける。ハチャメチャな結婚式風景に戸惑い続ける謹厳なイアンの両親も、やがてその雰囲気感化され、強いギリシャの酒ウヅに酔っ払う。トゥーラの父は「両

## マイ・ビッグ・ファット・ウェディング

家の名前の語源はリンゴとオレンジ。種類は違うが果物としては同じ」とあいさつする。この部分は、多様性を尊重しつつ一つの国民になるという、移民社会米国の理想の象徴的表現だ。

欧米で既に大ヒットしているというが、エスニック問題に興味がある私には、ハリウッド・コメディ的誇張も適度にあつて、実に楽しい映画だった。上映前、ギリシャ大使館の書記官が背景を説明したのはクラブ初

宮本 倫好(産経新聞出身)

——お世話になりました——

英国、エジプト、ニュージーランド、ロシア大使館の四人の特別賛助会員が任期を終え、七月末に帰国しました。思い出やお別れの弁を聞きました。

●キノシタさん(英国)

一番の思い出は昨年のW杯。英国人ファンへの誤解をとくため、開催地で説明会を開いたり、飲食店でチラシを配ったりしました。

フリーガンの来日を水際で食い止めたこともあり、大過なくすぎホッとなりました。日本のマスメディアにはクエスチョンタイムからガーデニングまで英国関連の話題があふれうれしいのですが、地味な教育改革や福祉分野でも報道が増えればと願っています。

●オサマさん(エジプト)

二〇〇〇年の「日本におけるエジプト年」の成功がおみやげです。考古学分野だけでなく映画、舞踊など今のエジプトを伝える催し大好評でした。心配なのは、日本人観光客の数。九七年のルクソール事件以降、少し持ち直したと思つたら、今度はイラク戦争。ピーク

時の半数の年間四万人まで減ってしまいました。

●ケルさん(ニュージーランド)

帰国後は、外務貿易省の投資促進課の担当になります。経済の規模は違いますが、両国は補完できる分野があるので、一層の緊密化に貢献できればと思います。日本の経済の指標は良くありませんが、このような時期だからこそ、多種多様な取り組みで、業界をリードしている中小を含むハイテク企業が多くあります。小泉さんみたく自信をもって、と言いたい。

●ヤーセネフさん(ロシア)

九谷焼の色使いと精巧なつくりに魅了されました。モスクワでは日本のホンモノの磁器、陶器は目にする機会が少なく、いつか展示会ができればと思っています。日本課にもどる予定なので、日本との関係はこれまで通りです。モスクワの日本大使館では「日本料理」の教室が開かれてるそうです。そこで勉強して、収集した九谷焼でおもてなしできればいいですね。

昭和基地  
便り ④

昭和基地（東  
オングル島）から  
二〇キロほど離れ  
たところに、「S  
16」という南極大  
陸の玄関口となる  
観測拠点がある。

「S16」は普段、  
人がいない。観測のための拠点と  
して雪上車や燃料、そりなどが置  
かれていた。今回はこの「S16」  
に総勢十人でやってきた。前の隊  
が残したそりを雪の中から掘り出  
すためである。

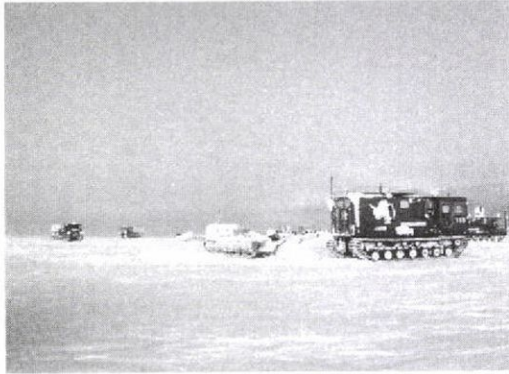
到着した翌日、南極の雪風、プ  
リザードが襲ってきた。いつ終わ  
るとも知れない雪と風。時に  
は風速三十近い強風が吹き  
つける。風が雪を舞い上げ、  
十メートル先が見えなくなる。プリ  
ザードが始まると、自分の位  
置を見失い遭難の恐れもある  
ため、外での作業はできない。  
「S16」の標高は六百以  
上あり、気温は昭和基地より  
も五度以上低い。プリザード  
のため予定の作業は遅れ、雪  
上車の中で仲間とともに天候

の回復を待つ。

雪上車の中はエンジンをかけて  
いれば暖房が効いているが、一酸  
化炭素中毒の恐れもあるため寝る  
ときにはエンジンを切り寝袋にも  
ぐり込む。鉄製の雪上車は外の寒  
さを車内に伝えてくる。車の柱に  
は霜が付き、吐く息はツララとな  
って天井に張り付く。車体そのも  
の風で音を立てて揺れる。

ブリザードは丸二日吹き続け、  
ようやく収まった。天候の回復と  
ともに雪に埋まったそりを引き出  
す作業に取りかかる。

この時期、日の出は午前十一時  
過ぎ。作業を始める朝はまだ暗く、



南極大陸の玄関口「S16」  
雪の平原が空まで続く

出張 ホテルは雪上車

ヘッドランプの明かりを頼りにそ  
りに付けられたワイヤーをスコッ  
プで掘り出し雪上車に掛け、引つ  
張り上げる。氷点下三〇度近い寒  
さで強く締まった雪から、そりは  
おいそれとは出てくれない。雪上  
車のオペレーターと無線でやりと  
りをしながら、雪上車をバックさ  
せて勢いをつけて前に出るとい  
う作業を十度ほど繰り返し、ようや  
くそりを引き上げることができた。

また吹きつける雪で目を開けて  
いられないので、ゴーグルをして  
作業にあたる。しかしゴーグルも  
顔からでる水蒸気ですぐに凍って  
曇り見えなくなる。はずすと今度  
はまっげが凍って見えなくなる。  
寒さと闘いながらの作業が続く。

手を休めて見上げると、夜明け  
で空が赤く染まり始めた。雪と氷  
の平原が空まで続く。この平原を  
数千キロも進み、南極点を目指し  
たアムンゼンやスコットに思いを  
はせた。

NHK社会部 藤田浩之

NHK越冬取材班の藤田記者たちの  
活動や最新の昭和基地の様子が  
<http://www.nhk.or.jp/nankyoku/index.html>で分か  
ります。

●囲碁の会○

紅友会と対抗戦

七夕ではありませんが、年に一  
度の紅友会との対抗戦が七月十九  
日（土）に開催されました。今年  
は、六段を筆頭に十九人の女性に  
対して、クラブからは三十人が参  
加、和やかに手談を楽しみました。  
三局を終わっての成績は、クラブ  
の三十勝二十七敗と、昨年の負け  
越しの雪辱を果たしました。中  
でも吉沢正也、安原和雄、日比野和  
幸の三氏の活躍が目立ちました。  
八月の例会はお休みです。次回  
は九月二十七日（土）午後一時か  
らいつものように宴会場で行いま  
す。



久々に清原会員（右）も参加。プレ  
ムナ五段（左から二人目 英国生ま  
れ）は三連勝でした

◇個人D会員

# プロフィール

A P通信東京支局が移転しました  
今年には会員社の新社屋ラッシュ  
です。汐留に完成した共同通信の  
新本社・汐留メディアタワーに、  
A P通信東京支局が移転しまし  
た。新住所は左記の通りです。  
〒105-7207

東京都港区東新橋1-7-1

汐留メディアタワー7階

電話 03-6215-8960

◇  
共同通信もメディアア局や管理部  
門はすでに移転、編集局は九月中  
旬以降移る予定で、今年末に本社  
移転を完了します。

日本テレビとテレビ朝日もそ  
れぞれ汐留、六本木に新社屋が完  
成。目下、大引越しの最中です。  
報道局の移転はテレビ朝日は九月  
末、日本テレビは十月初旬の予定  
だそうです。

◇関東大震災80周年企画

「大震災と報道展」

これまでの震災報道を新聞紙  
面、号外、報道写真、テレビ映像な  
どで紹介し、今後予想される大地  
震発生時に新聞や放送が果たすべ

き役割を考える企画展です。

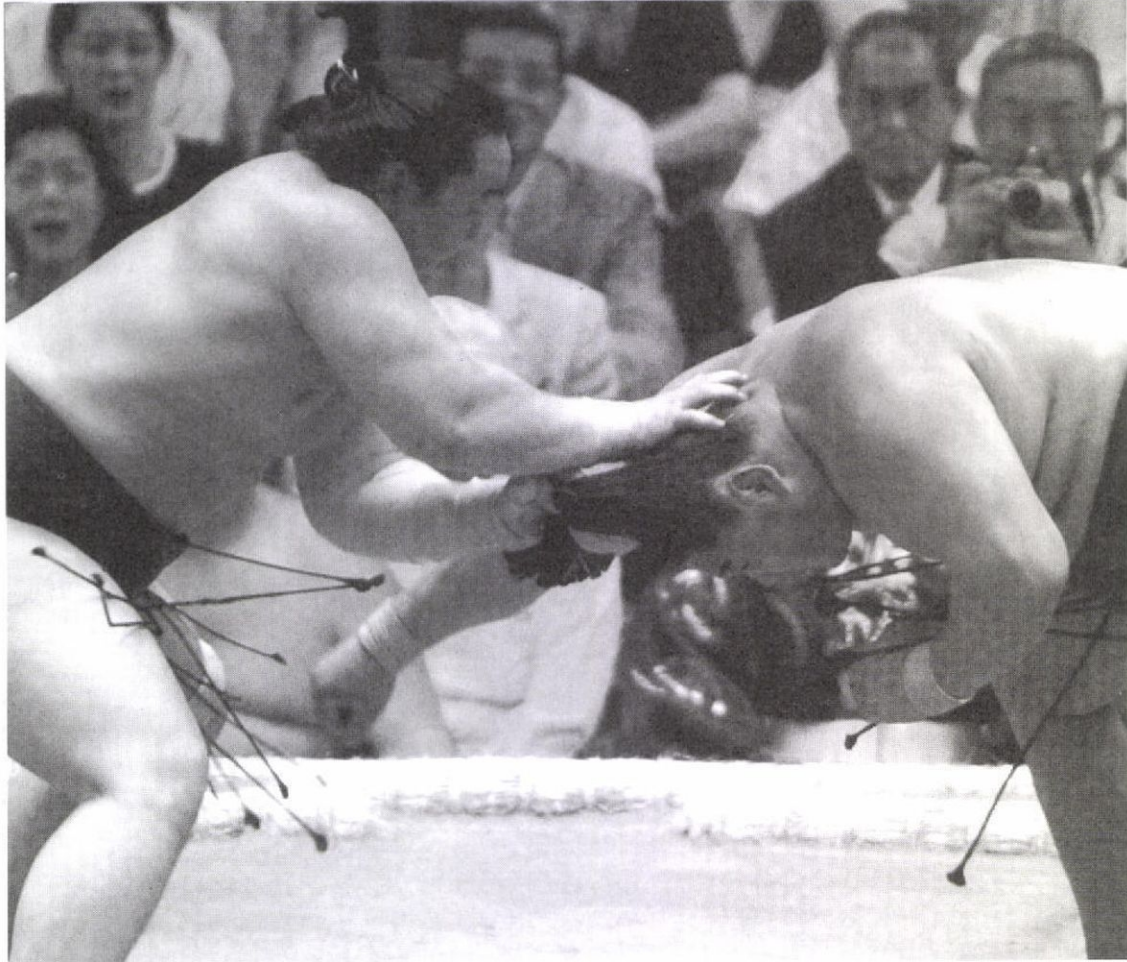
九月二十日(土)午後一時半か  
らは、新聞・放送の記者、解説委  
員らによるシンポジウム「大震災  
と報道の役割」も開催されます。

—新聞博物館で10月19日まで

# 写真部

写真 浅野 誠

(1991年中日新聞入社 大阪支社を経て)  
(2002年から名古屋本社編集局写真部)



旭鷲山のまげをつかみ、横綱朝青龍は反則となった  
(愛知県体育館 7.10)

## 反則負け

- A「あれはひどいよ。困ったもんだ」  
B「確かによくはない。反省すべきだね」  
A「反省では足りない。ルールを踏み違えて、素知らぬ顔だ」  
B「でも、ペナルティは黒星だった」  
A「黒星？ みんな国に帰れ帰れと総スカンだ。早く引き揚げればいいんだ」  
B「それは排外思想だよ。異文化を認めない態度はよくない」  
A「異文化？ 気に入らない相手をならざる呼ばわりしてぶっ飛ばすぞとすむ。上に立つものの品格の完全欠如だね」  
B「品格に問題があるかもしれないが、まだ若いんだ。修業を続けるうちにおのずから人格も陶冶されてくるだろう」  
A「まだ若い？ 何より問題は、証拠もないのに大量破壊兵器があると言いつてむりやり開戦したことだ。9・11テロとの関係も、今に至るまで出てこない」  
B「ちょっと待てよ。一体何の話だ」  
A「もちろんイラク戦争の話だよ。世界の保安官面をして、勝手な主張を押し通そうとする。だから嫌われるんだ」  
B「何だ。朝青龍の話かと思っただよ」  
A「朝青龍？ それは全く別問題だ。未完の利器は温かい目で見守ってやりたいね。人間、多少の欠点は付き物なんだから」

(森脇逸男)

記者研修会の申し込みは15日まで

毎年、地方紙、地方局の人たちの参加が多いクラブの記者研修会も、今年で六回目になりました。プログラムは一ページでご案内したとおりです。所定の申込用紙はすでに各社の編集局長、報道局長宛てにお送りしていますが、出席ご希望の方は事務局までお申し出ください。もちろん、在京会員社からの参加も大歓迎です。申し込み締め切りは十五日(金)です。多数の参加をお待ちしています。



「ケースに学ぶ企業の文化」

夏目大介 共著

(WOWOW出身)

敬愛大学で、いろいろな業種、企業の仲間と組んで「企業文化論」を講義したものを、共著としてまとめたものである。

私は自分の経歴から、「新日本製鐵とWOWOWの企業文化」の章を担当している。学究的な企業文化論の著作はこれまで多数あるが、ここでは経済実業人の立場から、企業文化を規定する根幹に事業の性格があると考え、鉄鋼業や放送業の業界の感覚から説き起こしている。

(白桃書房 三、四〇〇円)

寄贈書

「政治記者の目と耳」第5集

政治記者OB会

今井久夫会員

日本マーケットシェア事典

海野和雄会員

旅塵

楓 元夫会員

果てしなき論争 ロバート・マクナマラ編著

(訳) 仲 晃会員

招待券

朝日新聞社から『月光浴・20年の旅展』『ガラスの酒器・ヨーロッパ展』『クマのプーさんの世界展』、読売新聞社から『THE地震展』『アレクサンドロス大王と東西文明の交流展』の招待券をいただきました。お礼申しあげます。

生ビールで乾杯! 東京もやつと梅雨が明け夏本番。十階レストランでは恒例の生ビール・セットを提供しています。生ビール二杯におつまみ三品がついて二二五〇円(税別)。予約は3503-2766へ。8月29日まで。

訃報 富重静雄会員(全国朝日放送出身、83歳)が七月十九日に死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員 八〇九人 個人会員 一、七二五人 法人・個人賛助会員 八一社 二一〇人 特別賛助会員 六六人 名誉・功労会員 一二人

計 一三三〇社 一、八二二人

クラブの電話

(ダイヤルイン)

- ・和食レストラン(9階) 3503-2723
- ・洋食レストラン(10階) 3503-2766
- ・貸室予約 3503-2724
- ・受付、宴会打ち合わせ 3503-2721
- ・クラブ行事への申し込み 3503-2722
- ・会員事務 3503-2725
- ・経理 3503-2728

八月の行事予定(5日現在)

13日(水) 午後3時~4時30分 研究会

28日(木) 午後1時30分~3時30分 研究会

「北朝鮮」⑨ 下斗米伸夫・法政大学教授  
 会「地方から日本を変える―地方分権の進め方」 北川正恭・早稲田大学大学院教授 堂本曉子・千葉県知事 増田寛也・岩手県知事  
 29日(金) 正午~午後2時 昼食会 石原慎太郎・東京都知事

(行事案内電話) 〇三三三五〇三三七六四

会報委員会

委員長 住田良能  
 委員 仙石伸也 永井多恵子 中園龍二  
 橋場義之 福沢亜夫 元田 成  
 連絡 長谷川和子 本庄五月  
 (電話) 〇三三三五〇三三七五二  
 (FAX) 〇三三三五〇三三七二二